

平成 21 年 6 月 12 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720047

研究課題名（和文） 19世紀初頭・江戸における上方小説流入システムの研究

研究課題名（英文） Reseach on books exchanging in early 19c :between edo and kamigata

研究代表者

木越 俊介 (KIGOSHI SHUNSUKE)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：80360056

研究成果の概要：

3年間の研究の結果、「読本」と呼ばれる小説において、文化8年（1811）を境に江戸作者と上方画工の組み合わせが発生すること、また、板行が棚上げになった本の冊数を変更を追うことにより、江戸と上方の本屋間で「本替」を行っている形跡が認められ、これら进行分析し、論文としてまとめた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,800,000	0	1,800,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,400,000	210,000	3,610,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国文学・江戸時代後期・出版・上方・流通

1. 研究開始当初の背景

従来の上方における本屋や書籍をめぐる研究は厚いが、それぞれ江戸時代初期についてであったり、本屋間の利権争いについてであったりと、19世紀の江戸との流通面に注目した研究は極めて少ないと思われる。その理由は、江戸時代中期を境として文運が上方から江戸へ移るとい説が根強くあり、江戸時代後期の上方の小説についての研究が比較的手薄になっている点、直接的な資料が乏しいとされている点などが考えられる。

江戸時代後期においても上方の文運が衰退していたとは言えないことを、出版点数などの調査から明らかにしたのが、山本卓、「文運東漸と大坂書肆小政」（『文学』1-5、2000、134～143頁）である。さらに、田中則雄「人為と人情の世界—後期上方読本における長編構成の方法」（『説話論集』10、2001、217～244頁）は、19世紀の上方における読本の作品内容を検討し、江戸とは異なる特色として「人為」「人情」が強調されている点、神仏などの超越的な存在

が背後にない点などを指摘している。このように、上方そのものの文学やその営為についての研究は近年盛んになっている。ただ、いずれにしても上方のみを対象とした研究にとどまっているのが現状である。本研究ではこうした点に加え、江戸への流入という視点を導入している。すなわち、江戸とは異なる環境のもと、内容的にも独自の特色を有する上方の書物が、江戸にいかに対抗し、またいかに影響を受けた／与えたのか、従来ほぼ問題視されなかった点について研究していく。具体的には、流通面に注目し、上方の書籍が多量に江戸へ流入していたことを問題視し、小説内容も踏まえながら、江戸と上方との〈比較〉という立体的な視点を獲得するための調査が必要と考えた。

2. 研究の目的

本研究は、上方から江戸へという方向で、書籍の流通機構、商習慣などを解明していくものである。それにより見えてくるのは、江戸～上方の双方向の流通を中心とした書籍の全国展開であると思われる。江戸においては「問屋」の役割が重要であることが判明したが、上方ではさらに強固な「問屋」制度が意味を持ってくるとと思われる。具体的には、この問屋制度の機能とそれに対する新興勢力との対立や書籍の形態・内容の変化について具に研究したい。なおその際、出板関係資料と各書籍、そしてその内容面を有機的に把握することで、単なる物質面の研究にとどまらず文学史的な意義を含めて総合的に明らかにするのが一番の目的である。

こうした作業で見えてくるのは、上方の本屋たちのしたたかな営為であり、江戸に先んじて様々な商習慣を確立しようとする戦略性であると考えられる。これは、19世紀—明治時代も含む一の文学環境を考える上で、

これまでの江戸中心だった文学史観が再検討される大きな契機となると思われる。

3. 研究の方法

(1) 本研究は全国各地に所蔵される書物の現物を調査し、それら一つ一つの内容を具に検討していく。

効果的に研究を進めるために、研究の対象資料と範囲、調査先を既に絞り込んでいる。具体的には、江戸における『名目集』という出板資料に上方(京・大坂)の読本が多数掲載されていることに気づいたため、その「上方読本」作品の100以上のタイトルについて、著者、刊年に加え、全国のどこに所蔵されているかの一覧表を作成した。これにより、全国各地に調査に赴く際に調査漏れなく遂行することが可能であり、また、より多くの資料を所蔵している機関を優先的に調査することもできる。

また、本研究は申請者が大きなテーマのもとに行っている継続的な調査の一環であることから、前記2003-2005年度科学研究費採択分の調査の折に入手した資料(例えば江戸時代の諸記録など)を活用する。

さらに、データの加工については大学院生などを中心としたアルバイトを雇用することで、迅速な整理・データ解析ができるようにする。

(2) 2007年度の調査・研究としては、文化5年～9年の間に江戸もしくは大坂において刊行された読本についてのデータをまとめた。データ細目としては、作者・画工(絵師)・出版者・冊数、さらに江戸・大坂における出願などの手続きの日付や手続きを行った者などを対象とし、一覧にした。

(3) 2008 度は昨年度に調査・収集した対象となる資料の読み込みに時間と労力を割く。昨年度の研究により、文化9年(1812)前後の江戸～上方間の流通形態において、板元・作者に特色がある可能性を掴んだので、ここに関係する資料に対し、内容的に検討していきたい。さらに、当初の研究では想定していなかったが、江戸読本の最初期に位置づけられる建部綾足の小説(『西山物語』)は、本研究のテーマにおいて重要な作品であることにも思い至ったので、この作品について国文学的な手法にとどまらないアプローチで研究する。

また、板行が何らかの事情で棚上げされた作品に注目すること、また、作者は江戸の人物、画工は上方の人物である点などに注意を払うことで、書籍の流通のあり方の一端が垣間見られそうなので、この点を重点的に調査する。

4. 研究成果

(1) 文化5年～9年の間に江戸もしくは大坂において刊行された読本についてのデータをまとめた結果、下記の事象が確認された。

①文化8年を境に江戸の作者と上方の画工との組み合わせによる作品が出現すること。

②そのうち、出願されてから3年以上も保留となった作品が含まれていること。

③②のうち、絵師が当初の予定から変更している事例が複数認められること。

さらに、こうした動きに大坂の河内屋嘉七と江戸の西宮弥兵衛との間の提携関係が深く関与していることも判明した。

(2)さらに(1)の成果を応用し、下記の調査を行った。

①文化九年板行の読本作品のうち、未調査のものを書誌をとる。

②①に関連する文化10年以降に板行された読本作品の調査を行う。

③挿絵を描いている一峯斎馬円という人物の伝記を調査する。

この結果、上記①の文化九年板行作品群、すなわち、『復讐双三弦』『絵本玉搔頭』『信夫摺在原草紙』『金鱗化粧桜』『桜木物語』に関わる板元が江戸の西村与八・前川六左衛門、大坂の秋田屋太右衛門・河内屋嘉助といった面々であることが判明。そして、諸記録から、『復讐双三弦』『信夫摺在原草紙』が当初予定されていた冊数より増やして板行されていることが分かった。さらに、②にあたる『蛭人少女玉取草紙』『二葉の梅』『和漢の染分』『蛭狩宇治奇聞』などを巻き込んだ「本替(交易)」の有り様を、諸板元の関係性から整理してみた。やや複雑であるが、そこには、新興書肆を巻き込んだ、老舗の書肆のしたたかな営為が認められること、それと同時に、本替を行うことによって、読本という高価な商品が小売まで流通を浸透させることが狩野となっていることが明らかになった。まだ仮説の域を出ない部分もあるが、今後とも調査を継続的に続けていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 木越俊介、文化九年の本替、『日本文学』(査読あり) 57 巻 10 号、2008 年、p. 31-p. 40

② 木越俊介、読本の東西往来—文化期の事例を中心に、『上方文藝研究』(査読なし) 5 号、2008 年、p. 67-p. 78

③ 木越俊介、『奇談情之二筋道』について—読本改題本と人情本—、『山口県立大学国際文化学部紀要』(査読なし) 14 号、2008 年、p. 28-p. 35

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木越 俊介 (KIGOSHI SHUNSUKE)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：80360056

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：